

A. シュツツの「限定的意味領域」概念の検討

石井久雄（筑波大学大学院）

1. リアリティ問題としての青少年問題

現代青少年の様々な行動が社会問題として取り上げられている。こうした社会問題は、彼らが構成するリアリティに起因する問題として捉えることができる。例えば、青少年が相互にディスコミュニケーション状態になっていること、いじめ問題で、いじめる側といじめられる側の状況に対する解釈が異なっていることがそれである。こうした問題は、外的世界に対する意味づけ方の問題であり、リアリティを他者と共有することの問題であり、多元化しつつある社会における青少年のリアリティの有様の問題であるといえる。

個人が構成するリアリティについて、社会学的に説明を行っているのが、A.シュツツやP.L.バーガーをはじめとする現象学的社会学者である。また、リアリティ問題とその把握において重要な意味を持つのが、A.シュツツの「限定的意味領域」概念である。そこで、以下ではまず第1に、A.シュツツの「限定的意味領域」概念を批判的に検討することで、現代青少年のリアリティ構成状況を考察してみることにする。第2に、こうした状況を省みた後に、特異な限定的意味領域である日常生活世界の概念について検討してゆくことにする。

2. 「限定的意味領域」概念の検討と現代青少年のリアリティ構成状況

(1) 日常生活世界の至上性の低下と青少年のリアリティの非共有化

A.シュツツは、日常生活世界は一つの限定的意味領域であるとしながらも、その他の世界とは異なるものだと述べている。すなわち、日常生活世界は間主観性によって成り立っている世界であり、その間主観性ゆえに、他の世界と区別できる「至高の現実」であると述べているのである。

しかし、至上性は常に保たれているわけではな

い。岩見(1)は、間主観性が成立しにくくなれば、至高の現実としての至上性は低下し、相対的に限定的意味領域の規定力が高まると述べている。こうした日常生活世界の至上性が低下している事態は、青少年個々の立場からみた場合、彼らが外的世界に対して他者と異なる意味づけをしていることであり、他者との共有部分が少ないリアリティを構成していることを意味しているのである。こうしたことは、前述したいじめ問題における両者の状況の解釈が異なっているということからも見て取ることができる。従って、至高の現実の至上性は常に保たれているものではなく、間主観性の度合いが低下することによって、至上性は低下するということもあり得ることを示しているのである。

(2) 限定的意味領域の多元化と青少年の限定的意味領域への閉塞化

A.シュツツによれば、限定的意味領域は、日常生活世界の派生型にすぎないものであり、たとえ個人が限定的意味領域にいたとしても母港としての日常生活世界に舞い戻ってくるのである。また、個人は生の注意の移行とともに、多元的な限定的意味領域間を行き来するものである。

しかし、いついかなる場合も個人は多元的現実を行き来しているとは限らないのである。例えば、バーチャル・リアリティやパソコン通信やインターネットなど情報化を加速させている現代社会においては、多元的現実の様相が、ますます深くなっていると考えられる。しかし、こうした状況とは裏腹に、現代青少年においては、ある一つの限定的意味領域のなかで閉塞している事態もあり得るのである。こうした事態の一端を示すものが、「オタク」の出現である。岩見によれば前述した限定的意味領域の規定力の上昇を背景としながら、

ある一つの意味領域のなかで、若者が意味の充実を図っていると述べている。このように、おたく化し、ある限定的意味領域に閉塞している青少年の姿が浮かび上がってくることは、それだけ青少年においては、生の注意とともに限定的意味領域間を移行するということはあり得ないということを示しているのである。

(3) 限定的意味領域における認知様式の日常生活世界への侵犯

限定的意味領域は、それぞれ異なる認知様式によって成り立っているものである。つまり、他の限定的意味領域に行けば、異なる認知様式をもつことになるということである。さらに、ある限定的意味領域から他の限定的意味領域への移行には、ショックが伴うものである。

しかし、必ずしも他の世界へ行けば、その世界の認知様式によって現実を意味付けるということはないのである。例えば、前述した現代青少年のオタク化の傾向は、ある限定的意味領域の世界に固執し、閉塞することである。つまり、他の限定的意味領域にいったとしても、その世界の認知様式をひきづっていることがあり得ることを示唆しているのである。別の面からいえば、限定的意味領域間の移動に伴うショックをショックとして感じなくなっているという事態もあり得ることである。その先には、日常生活世界においても他の限定的意味領域の認知様式によって経験を意味付けるという、限定的意味領域における認知様式の日常生活世界への侵犯という事態も生じ得るということを意味しているのである。

以上のように、現代青少年のリアリティ構成状況をみるとことによって、限定的意味領域概念を批判的に検討できるのである。

3. 特異な限定的意味領域としての「日常生活世界」概念の検討

現代青少年のリアリティ構成を明らかにすることによって、はじめて特異な限定的意味領域である日常生活世界について考察することができるのである。なぜならば、前述した青少年のリアリテ

ィ構成状況を省みたとき、リアリティの非共有化、限定的意味領域への閉塞化、日常生活世界への侵犯という問題は、日常生活世界を成立させている間主観性に起因するものであるからである。そこで、以下では、間主観性を成立させている基盤である「労働（working）」の概念の検討を行ってゆくことにする。具体的には、労働における間主観性についてである。

まず第1に、相互行為としての労働という点である。日常生活世界が間主観性によって成り立っているということは、何らかの社会関係があり、何らかの社会的行為があるということである。「労働」とは、企図に基づきながら外的世界においてなされる行為のことであるので、社会的行為があるということは、労働という性質を持った諸々の行為があるということである。

第2に、労働と他者との了解という点である。労働とは、外的世界になされる行為であるので、自己の行為が他者の了解にさらされるということを意味している。つまり、行為の企図としての自己の想像の世界が、実現しようとして外的世界に出たとたん、そうした行為は自己のものだけではなく、他者にとっても意味をもつものとなるということである。以上のように、相互行為としての労働、他者の了解可能なものとしての労働ということが労働における間主観性であり、間主観性を成立させている要因であるといえる。

4. おわりに

現代青少年の社会化上の問題として、こうした労働の経験の減少、及びそれにともなう他者の視点の欠如が、現代青少年のリアリティ構成が社会問題として立ち上がっている要因であると考えられる。現代青少年の構成するリアリティが社会問題として関心が寄せられている現在、A. シュツツの「限定的意味領域」概念及び、「労働」の概念はますます重要性を帯びてゆくものと考えられる。

注1) 岩見和彦著 「青春の変貌」 関西大学出版部 1993 pp.165 - 176.